

平成29年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立諏訪小学校 教諭 佐々木 麻衣

- 1 派遣期日 平成29年11月2日(木)
- 2 研修先 学校名 京都市立梅小路小学校
所在地 〒600-8835 京都市下京区歓喜町3
<http://www.edu.city.kyoto.jp/hp/umekouji-s/>

3 研修内容

(1) 視察校における研究への取り組み

研究主題：自ら考え、行動する「生きる力」を身に付けた子どもの育成
～「主体的・対話的で深い学び」を実現するカリキュラム開発と実践～

京都市立梅小路小学校では、平成28年度より文部科学省より「教科等の本質を踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究事業」指定を受け、子どもたちに「何を教えるのか」だけでなく、「どのように学ぶのか」という視点を大切に、「主体的・対話的で深い学び」を目指し、取組を進めている。視察校では、以下の3つの柱を中心にカリキュラム開発と実践を行っている。

① 単元構想及び単位時間の授業の改善

単元展開の改善として、指導案の作成・補助教材の開発を行っている。指導案は、言語活動を意識した課題設定や使用する補助教材を明らかにして作成されている。補助教材は、子どもたちの発達段階や学習の理解度に応じて自校で開発している。また、アクティブ・ラーニングを意識した授業改善として、1時間の授業の司会・進行を子どもたちで行っている。司会団は司会・副司会(記録)・タイムキーパーの3名で構成され、司会団の児童が固定されないように当番制になっている。また、教室壁面には「司会力を身に付けよう」掲示され、司会者には「司会カード」が配られるなど、全ての児童がスムーズに司会を行えるように配慮されている。

② 各教科等 横断的なカリキュラムの開発

平成28年度より、学習内容や知識・技能について合科的、横断的に指導するために、年間指導計画を作成し、外国語活動・外国語の時間に他教科等の教材を使ったり、内容を扱ったりしている。また、パワーアップタイム(モジュールタイムの活用)を午後の清掃活動後に15分間設け、汎用的能力の育成を目指して英語と読書に重点を置き取組を進めている。

③ 外国語教育

外国語活動・外国語の学習以外の他教科の時間でも、外国語を取り入れた学習活動を行っている。例えば、学習の流れが英語表記(めあて:Today's Goal, グループ活動:Group work など)され、担任も子どもたちも英語で読み進めながら学習を行っている。また、子どもたちが英語に親しみをもてるように、季節に応じた英語表記の掲示物が廊下に貼られていたり、特別教室等が英語名で表記されていたりした。さらに、文字だけでなく、音声で親しめるように掲示物にEnglish Penが活用できるように工夫されていた。



「教室等の英語表記」

※耳のマークにEnglish Penをあてると、英語を聞くことができる。

(2) 授業を参観して

どの学習でも、授業の始めに担任が本時の学習の進め方を確認していた。学習の進め方もめあてだけでなく、どの場面でペア学習をするのか、クラスで話し合うのかが提示されていたので全員が学習に見通しをもって取り組むことができていた。また、子どもたちが中心となって学習を進めている光景や、英語を恥ずかしがらずに積極的に歌ったり、話したりする子どもたちの姿から子どもたちが学習に対して主体的に取り組んでいることを感じた。担任も授業の中で英語を積極的に話し、T1としての役割を担う姿が見られた。

【授業実践の例】

① 3 学年 外国語活動「あったかカレーをつくろう！」

前時までに子どもたちが、食べ物について食材の英語の表現や買い物の場面での英語の表現を十分に慣れ親しんだ上で、家族のためにカレーを作る活動を行う。本時は『積極的に欲しいものを訪ねたり答えたりしようとして買い物を楽しむ』ことを学習課題として設定していた。子どもたちは、二人組で売り手と買い手に分かれて、買い物の場面でのやり取りをしながら、食材カードを渡したり、もらったりする活動をしていた。子どもたちが作りたいカレーの食材を集める活動は、日常生活のお遣いのような達成感を味わうことができていた。

② 6 学年 外国語「京都駅で外国の人にインタビューしよう」

次時に京都駅で外国の人にインタビューするために、本時では、近隣の大学の留学生を学校に招き、『積極的に留学生にインタビューし、伝わるかを確認する』ことを学習課題として設定していた。留学生に「無口な人」や「早口で話す人」など色々なタイプの外国の人を演じてもらうことで、子どもたちが実際のインタビューで出会うかもしれない様々な外国人に対応できるよう配慮されていた。子どもたちは英語で質問するだけでなく、答えを聞き取り、ワークシートに書き込むことができていた。



【留学生にインタビューする児童】

③ 2 学年 算数科「みのまわりの形 はっ見し隊」

前時で、タブレット端末の写真機能を使って、校内にある「三角」と「四角」を撮影した画像をもとに、『三角形と四角形の定義を考える』ことを学習課題として設定していた。司会団は、「司会カード」を基に授業を進めることができていた。また、子どもたちが算数用語を用いて「わけ」が説明できるように、教師が電子黒板を使って支援することで、子どもたちは「えらぶ」、「くらべる」という思考スキルを使って、「わけ」をノートに書いたり、友達に説明したりすることができていた。



【壁面掲示】



【児童の司会で進められる授業】



【本時の学習の進め方の確認】

4 感想

- 子ども司会・・・子どもたちが司会を行うことに慣れており、アクティブ・ラーニングの視点から学習を進めることができる。
- 電子黒板・・・子どもがノートに書いた考えを電子黒板に映すだけでなく、タブレット端末のように書き込んだり、移動したりすることができるので、算数科で図形の単元を扱う際に分かりやすいと感じた。
- 校内のユニバーサルデザイン化・・・発達段階に応じて掲示物が統一されているので、子どもたちが段階を踏んで、能力を確実にレベルアップすることができる。
- 外国語に慣れ親しめる環境・・・日常生活の中で外国語に慣れ親しめる環境作りができているので、外国語に対して子どもたちが積極的に取り組んでいた。
- 分野に精通した豊富な人材・・・理科専科の教員や ICT 活用支援員、英語教育支援員、総合育成支援員等、担任以外の人材が十分に確保されていた。そのため、補助教材等の充実だけでなく、担任の授業準備などの負担も軽減されているのではないかと感じた。